

2026 AUTOBACS SUPER GT Round1 OKAYAMA GT 300km RACE

Round 1 岡山国際サーキット

apr LC500h GT

apr

Racing Constructor

apr

Racing Constructor

2026 AUTOBACS SUPER GT Round 1

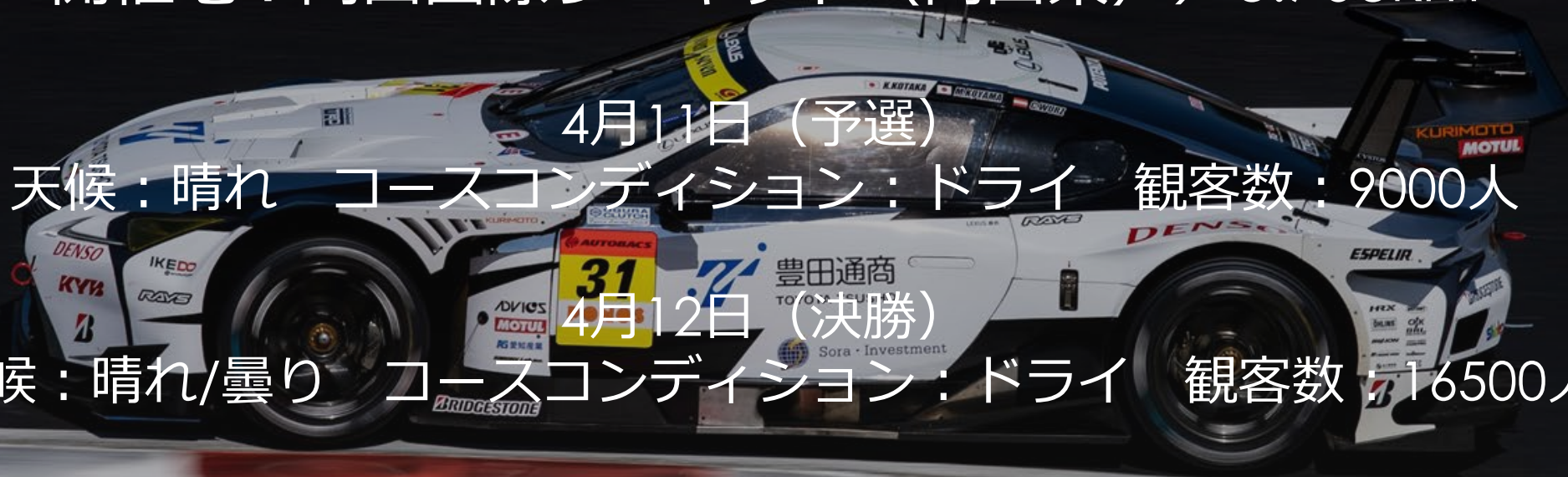
開催地：岡山国際サーキット（岡山県） / 3.703km

4月11日（予選）

天候：晴れ コースコンディション：ドライ 観客数：9000人

4月12日（決勝）

天候：晴れ/曇り コースコンディション：ドライ 観客数：16500人



2年ぶりの“価値ある”3位表彰台。つかんだのは手応えと次なる課題

aprの31号車は、LC500h GTで4年目のシーズンを迎えた。ドライバーラインアップは第2ドライバーの小山美姫を継続、第1ドライバーには2023年から2024年までLC500h GTのステアリングを握っていた小高一斗が復帰した。そして第3ドライバーとして、今年から拠点を日本に移し、スーパーフォーミュラにも参戦するチャーリー・ブルツを登録する。

apr LC500h GTは、小高を擁した2023年第7戦オートポリスと2024年第5戦鈴鹿(台風の影響で延期、最終戦として開催)で3位表彰台を獲得。車両としての高いパフォーマンスを示したが、反面2025年は入賞1回と苦しいシーズンになってしまった。

今季のオフシーズンテストでは、小高を中心に昨年うまくいかなかった理由を徹底追求。時間は要したが、富士公式テストでその答えが見つかった。ホイールベースが長く、ダウンフォースが活かせるコースに適したLC500h GTにとって、決して得意とは言えない岡山ではあるが、チーム2年目の小山も成長し、2年ぶりの表彰台、さらにはタイトルも見据えたシーズンが始まる。

公式練習／12位 4月11日(土)9:30～11:25

公式練習開始時の気温は18度、路面温度は24度と、この時期としてはやや高めのコンディション。だが、チームはこれを見越し、同スペックのタイヤを4セット持ち込んだ。予選アタックに向け、公式練習でふたりのドライバーがニュータイヤの感触をつかめるようにした戦略だ。

この週末、最初の走行を担当したのは小高。コースイン直後に赤旗による中断があったが、再開して7周目、結果的に31号車にとってこのセッションのベストタイムとなる1分27秒100を記録する。このときのタイミングモニター上の順位は6番手だった。

17周目には小山に交代。小山はユーズドタイヤながら1分27秒488をマークする。その後、再び小高がステアリングを握った。これらのピットのタイミングでセッティングをアジャストするも、最小限の変更ですんだ。それほどに、クルマもタイヤも良好だった。

10分間のGT300専有の時間帯は、小山がニュータイヤを履いて予選シミュレーション。小高とほぼ同タイムの1分27秒102を刻んだ。リザルトとしては12番手だったが、これは決勝を見据えたロングランに時間を費やしたのが理由。早々に、決勝への自信もつかむことができた公式練習となった。



公式予選 4月12日(土)

Q1 A/2位 14:00~14:10

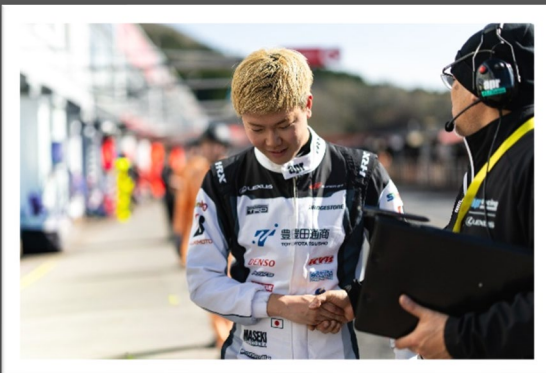
Q2/3位 15:14~15:24

予選に向けて、31号車は「予選専用セッティング」を施した。昨年はふたりのレギュラードライバーがフル参戦は初めてであり、安定方向のセットとしていたが、小高の復帰で予選専用セットが作れるようになり、小山も成長して「尖った予選セット」にも対応できるようになったからだ。

Q1はA組に出走し、小山が担当。気温は25度、路面温度は34度まで上昇していた。小山はタイヤを温めながら徐々にペースを上げていき、5周目にアタック。セクター1とセクター3で全体ベストをマークし、1分25秒725を記録。中低速コーナーが主体の岡山だが、セクター1の2コーナーとセクター3のマイクナイトコーナーは高速区間であり、LC500h GTの特性を引き出したことになる。小山はA組2番手でQ2進出を果たした。

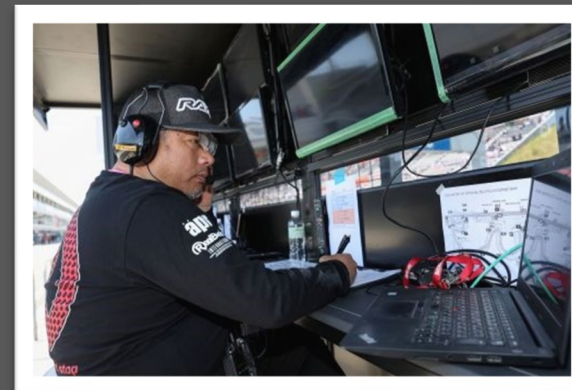
Q2の小高も5周目にアタックを開始。セクター1で全体ベストを刻み、快走を続ける。しかし、最終コーナーでわずかにトラックリミット違反があり、このラップの1分24秒725が抹消されてしまった。小高はそのままアタックを続け、6周目に1分25秒228をマーク。ピークグリップを過ぎたタイヤながら、3番グリッドを得る意地を見せた。





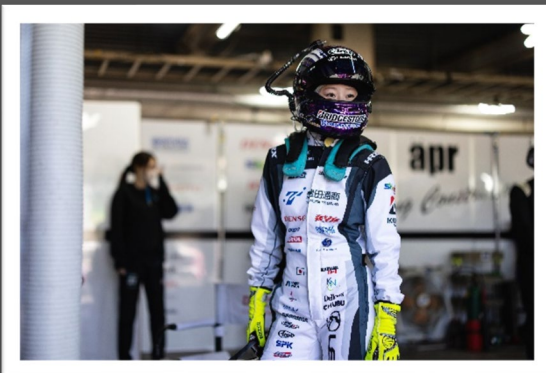
小高一斗選手

オフシーズンのテストで、2024年に良かったところ、2025年に悪かったところの答え合わせをしっかりとやってきたのが奏功しましたね。僕のアタックは最終コーナーでちょっと欲を出しすぎてしまって……。それがなければポールポジションも見えていたと思います。個人としては悔しいですが、開幕戦からポールポジションや優勝争いができるクルマだということを証明できたのは良かったですね。



金曾裕人監督

小高選手が復帰してくれたことで、開幕戦までに時間はかかりましたがLC500h GT本来のパフォーマンスが出せるようになりました。公式練習では、決勝を見据えた状態で走っていたので、12位というリザルトでも予選に向けては自信がありましたね。小山選手のQ1はトラフィックもあつての2番手でしたが、それがなければ一番時計をマークしていたんじゃないかな。予選のトラフィックは相手もアタック中だからしかたない。Q2の小高選手のアタックラップは四輪脱輪の検証と出たのでそのまま連続でアタックして、よくぞ3番手で留まってくれました。決勝は欲をかかず、ポイントを確実に獲りにいきます。



小山 美姫選手

公式練習ではユーズドタイヤで走っても良いフィーリングでした。持ち込んだタイヤが今回のコンディションに合っていますね。予選はタイヤのウォームアップもうまくいき、2コーナーすぎまでは過去一番というくらいに良い走りができていましたが、その先で前走車に詰まってしまったり、自分としても完璧な走りではなくて、そこでのロスがなければトップ通過もできたかなと思うもったいなかったです。でも、クルマも含めて高いパフォーマンスを示せたと思います。

決勝レース(77周)／3位 4月12日(日)13:25～15:20

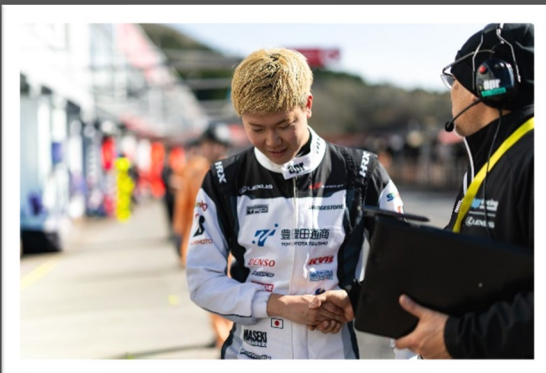
前日に続き、決勝日も快晴。気温は24度、路面温度は39度というコンディションで2026年シーズンの開幕戦決勝がスタートした。

スタートドライバーは小山。パレードラップ、フォーメーションラップでしっかりとタイヤを温め、混戦のスタートで3番手を死守する。その後は2番手を走る#2 HYPER WATER INGING GR86 GTの背後に迫り続けた。20周目にはバックストレートからのヘアピンコーナーでアウトから並びかけるが、抜くには至らず。そもそも岡山は抜き難いサーキットだが、ヘアピンのような小さなコーナーはホイールベースが短いGR86 GTのほうが有利だ。以降も攻め続けるが、順位を入れ替えることはできず25周目にピットに入り小高にバトンを託す。

31号車はこれまでにタイヤ無交換作戦を採ることもあったが、今回は4輪を交換してコース上で勝負する戦略を選んだ。それも有り、直後にピットインしてフロントタイヤ2本のみ交換で作業時間を短縮させた#65 LEON PYRAMID AMGに先行を許す。小高はフレッシュタイヤの強みを活かして果敢に攻めるが、ディフェンディングチャンピオンの守りは堅く、なかなか抜くことができない。だが、小高は諦めず、43周目のヘアピンでアウト側から並びかけると、続くリボルバーコーナーでインを取りオーバーテイク。まだピットに入っていない車両があるため見た目上は4番手だが、実質3番手に浮上した。

その攻防でタイヤを使ってしまったこともあり、レース終盤には#4 グッドスマイル 初音ミク AMGに迫られるが、今度は小高の堅い守りで振り切り、0.442秒差で3位のチェッカーを受けた。31号車と小高は2年ぶり、小山はスーパーGT初の表彰台に登壇。タイトル争いも視野に入る上々の結果を得た。





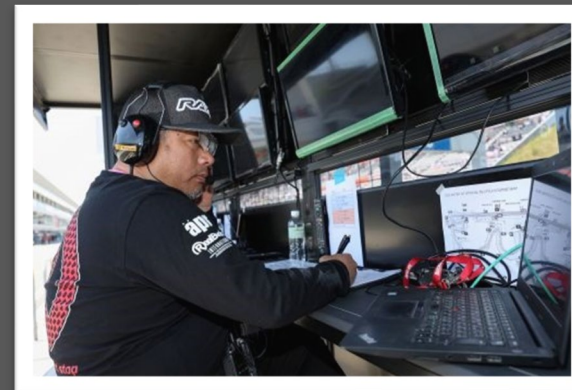
小高一斗選手

得意とは言えない岡山での3位は良かったと思いますが、本音を言えば悔しい3位ですね。タイヤがフレッシュなうちに順位を上げたかったのですが、ピットで前にいかれてしまった65号車を抜くのに時間がかかってしまいました。抜いてからはタイヤのピークも過ぎていて、そこから2番手を追いかけることはできませんでした。4号車に迫られたときは、抑えるポイントが分かっていたので焦りはなかったです。結果的に、予選でポールポジションを獲れていれば優勝も見えていたと思うので、そこが反省点ですね



小山 美姫選手

スーパーGTの表彰台から見る景色は初めてで、ファンや関係者の方たちが喜んでいる顔を見れたのは良かったし、応援してくれるみなさんに感謝しています。でも、自分的にはがっかりというか……。タイヤもすごく良くてトップを争えるペースがあったのに、2号車を抜けなかったのが悔しい。何度もチャレンジして、GT500が絡むタイミングとかそういうチャンスを活かすこともできませんでした。自分が順位を上げて小高選手につなげば、結果も違ったと思います



金曾裕人監督

ドライバーふたりが本当に良い仕事をしてくれました。LC500hはハイブリッドシステムを搭載しているぶん重く、ガソリン満タンのスタート直後はペースが上げられないなかで、小山選手はしっかりとポジションをキープしてくれました。小高選手も終盤迫られた4号車のほうが速かったのに、頑張っ
て抑え切ってくれ、表彰台は素直にうれしいです。チームとしても、クルマをもっと速くしないと駄目だし、ピット作業ももっと短縮しないと駄目。次のステップが見えました。価値ある3位に対して、たくさんのファンのみなさまに感謝いたします